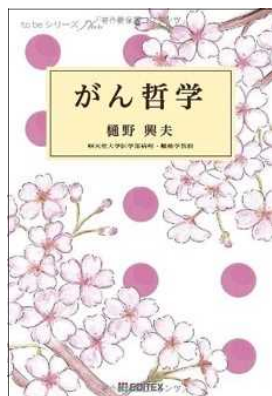


# 「先にガリラヤへ行く」 (マルコ14:27～31)

挽地 茂男

2019.7.28 日本基督教団・千歳丘教会

樋野興夫先生講演会〈がん哲学と人生〉が来週に迫ってまいりました。樋野先生は立花隆氏との対談の中でこう言っておられます。「私は『がん哲学外来』を始めてから、末期のがん患者さんと接し、自分自身の人生なんか甘っちょろく見えてきて、がん患者さんでないと一人前ではないような錯覚に陥ることもありますよ」(『がん哲学』139頁)。この発言は初期の著作で、しばしば繰り返されます。別の本ではこうも言われます。「がん患者に接して分かるのは、自分が一人前の人間ではないということです。未熟な人間だと思います。『まだ、がんにもなっていないのか』と言う感じです。がんになったほうが立派な人間に見えてきます。／そういう意味で、我々は偉そうなことを言っても未熟です。がん患者に接して



いると、自分の毎日の生活の嫌なことなど、どうしてもよくなりますね。自分の周りのことで一喜一憂するのが恥ずかしくなりますね。苦勞した人間と接すると成長するというのは、そういうことでしょうね。自分自身が未熟だになって、思うようになりますよ」(『がん哲学から人生を読み解く』72頁)。ですからこのような言葉も出てきます。「患者さんを尊敬できないような医者はダメだと、私は常々思っています。医学部の学生や若いドクターにもよくそう言います。実際、がんの患者さんの姿に人間としての自分の未熟さを知る、かなわないと思うときがあるからです。尊敬の念とは、そこから生じるものです。／とくに心打たれるのは、静思している患者さんの姿です。なぜならその境地に至るまでの道のりは決して平坦なものではないからです」(『がん哲学外来の話』86-87頁)。



本日の聖書の箇所では主イエスは、「弟子たちの躓き」を預言します。そして物語が進んでいって弟子たちが主イエスを否認したり、躓いたりする姿を見て「ああ、なんて愚かな人たちなんだろう」とまずは思うのです、わたしたちは。しかしそれだけでいいでしょうか。少し視点を変えて、弟子たちを「苦労した人たち」という視点から見ることはいくつか。主イエスについていくことは、とても大変なことだったと思います。決して平坦ではない道を歩んできたと思うからです。イエス・キリストは、まだ、社会的な認知を受けた成功者ではありませんでした。イエス・キリストを創始者とする伝統ができあがっていたわけでも、盤石な組織ができあがっていたわけでも、莫大な経済的バックグラウンドを持っていたわけでもありませんでした。ただその教えと人格に対する信頼だけ



が弟子たちを  
支えていた  
のです。  
もちろん、  
主イエスが



何か事を成し遂げたときには、自分たちもイエスの右に左にと、重要な幹部職に就けると浅はかな夢を見た弟子たちもいましたが、それも確実な根拠のある夢ではありませんでした。なのに、よくも弟子たちは、エルサレムまで同行してきたと思います。しかし弟子の一人であったユダは、主イエスに見切りをつけたのだと思います。エルサレム神殿経済共同体に立ち向かう主イエスの姿に、神殿境内で「祈りの家」を「強盗の巣」<sup>なまり</sup>にしている商人たちを追い出している姿に、また、ガリラヤ訛<sup>なまり</sup>のある言葉を恥じることもなく首都エルサレムの最高議会のお歴々に論戦を挑むその姿に、<sup>いつとき</sup>一時、かつての旧約の預言者の姿を重ねてその信仰と勇氣に感嘆を覚えたとしても、ついに、その巨大な太陽に立ち向かっていく蜂のような姿に、将来を見切ったのです。それでもまだ、彼らの中には「たとえ、御一緒に死なねばならなくなつて

も、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」(v.31)と言う弟子たちも残っていました。しかしついに、彼らに命の危険が迫ってきます。彼らはその言葉とは裏腹に、命惜しさに逃げてしまいます。しかし逃げたとしても、「卑怯者」として、わたしたちは簡単に彼らを責めることができないように思います。逃げるのがふつうだと思います。自分の命を投げ出すことの出来る人物など早々にいるはずがありません。

しかし不思議なのは、そんなふつうの人たちが、挫折の後、再度、立ち直ってくるのです。しかも、今度は、自分の命までかけて、イエス・キリストを伝える人になってくる。この変貌ぶりはただ事ではありません。ちょっとした意識の転換で、起きるような事態ではないのです。これはやはり大変なことが起きているとしか考えられないのです。死んだはずの教祖のことを、今度は、自分たちの命をかけて伝えているのです。何が弟子たちをそうさせたのか、「新約聖書の謎」と呼ばれる事柄です。

「復活があったから」と簡単に言ってしまうないように今日はした

いと思います。

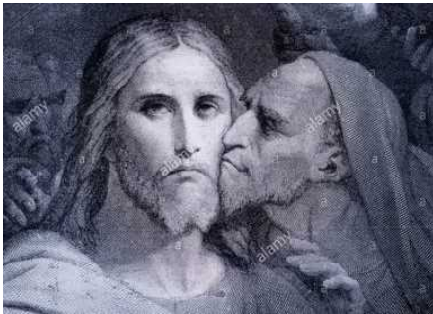
さてわたしたちは先週までルカによる福音書15章の「失われたもの」のたとえを読んできました。その中心は「放蕩息子」のたとえでした。それは、わたしたちが受難物語で主イエスを捨てていく弟子たちの姿を読むときに、「失敗した愚かな弟子たち」という視点だけではなく、つまり「放蕩息子」で言えば、親と故郷を捨てて遠い国で敗残してしまった息子を「情けないやつ」と見る視点だけではなく、その息子を慈しみ、帰りを待つ父親の視点を忘れないようにしたいからです。神は自分に背を向けた者を待っておられる神なのです。その父親の視点を持つとき、今日出てくる「ガリラヤ」のもつ意味が理解されてきます。〔それについては後ほど扱います。〕

さて時は過越祭（+除酵祭）で





スルバラン「神の小羊」



す。祭りの賑わいに紛れるようにして、ユダヤ人の宗教指導者たちはイエスの暗殺を画策していました。エルサレム神殿の周りには屠

られる過越の小羊が、多いときには2万頭も集められていました。都を取り巻いていた小羊の声の残響が今も残っているようです。主イエスの受難物語の全体は、**暗殺の緊迫感と祭のエネルギー**（過越祭・除酵祭）に覆われています。つまり。イエス暗殺の〈策謀〉と過越の小羊の〈屠殺〉がこの物語の背景です

主イエスが弟子たちと過越の食事をしているときも、ユダは主イエスを引き渡す機会を狙っていました(14:10-11)。チャンス到来です。食事を終えて主イエスと弟子

たちは、祭で賑わうエルサレム城内からオリーブ山へと移動したのです。暗殺を企てる者にはチャンス到来です。ユダは夜陰に紛れて、取り方を手配するために、姿を消したのでした。

いつもならエルサレムをあとにして、夜は、ベタニアに宿を取るはずの主イエスが、この夜、ベタニアには帰らずオリーブ山に行かれたのは、ついに時が来たことを、主イエスは—預言者たちと同じ死を—覚悟していたからです。この後続く「ゲツセマネの祈り」の記事とともに、主イエスの中では受難の接近が確実に自覚されていたのです。主イエスは、しばらく後に起ころうとしてる〈イエスの逮捕〉から始まる愁嘆場に弟子たちが耐えられないことは分かっていました。旧約の預言をひいて主イエスはこう語ります。27節。

「14:27 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆わたしに



預言者ゼカリヤ(システイーナ天井画)

つまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう』／と書いてあるからだ。」



ヒエロニムス・ボツシュ「キリストの逮捕」

この言葉は、ゼカリヤ書 13 章 7 節の言葉です。

ゼカリヤ書の言葉に少しとどまることで、主イエスの意図が明確になります。引用されている旧約聖書ゼカリヤ書 13 章 7 節の言葉はこうなっています。「**ゼカ13:7 剣よ、起きよ、わたしの羊飼いに立ち向かえ／わたしの同僚であった男に立ち向かえと／万軍の主は言われる。羊飼いを撃て、羊の群れは散らされるがよい。わたしは、また手を返して小さいものを撃つ。**」ゼカリヤ書で言う「羊飼い」とは偽りを預言する預言者のことで、この偽りの預言者を「彼の父母が刺し貫く」と、預言者ゼカリヤを通して主は言われるのです。偽りの預言者集団のリーダーである預言者(羊飼い)——もちろん主イエスは偽りの預言者ではありませんが預言者(羊飼い)——を撃つとその弟子たち(羊)は散らされることになります。こうしてゼカリヤ 13 章 8 節。「**ゼカ13:8 この地のどこでもこうなる、と主は言われる。三分の二は死に絶え、三分**

**の一が残る。**」そして、この残った三分の一を、主なる神は、特別な意図を持って取り扱うと言われるのです。ゼカリヤ書 13 章 9 節 a。

「**13:9 この三分の一をわたしは火に入れ／銀を精錬するように精錬し／金を試すように試す。**」つまりかつて偽りの預言者の弟子たちであった者たちの真価を問うことによって、真の弟子を残そうと、主なる神は考えておられる、というのです。ゼカリヤ 13 章 9 節 b。

「**彼がわが名を呼べば、わたしは彼に答え／「彼こそわたしの民」と言い／彼は、「主こそわたしの神」と答えるであろう。**」ゼカリ



ヤ書に照らしてみると、弟子たちのつまずきについての主イエスの予言のもう一つの側面が見えてきます。主イエスの視野の中には、「真の弟子集団」を精錬・吟味し獲得する意図があったのではないのでしょうか。主イエスは、真の弟子を必要としておられたのです。

さて、わたしたちが今読んでいる箇所には、もう一つ気になる言



ガリラヤ湖(山から見下ろす)

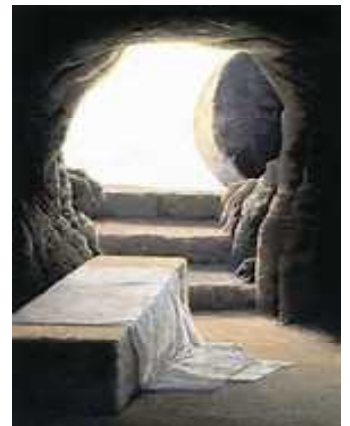
葉がでてきます。次の言葉です。28節。「14:28

しかし、

わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」主イエスはガリラヤで弟子たちを待つというのです。ガリラヤでの再会を約束する言葉がもう一箇所あります。それも見ておきましょう。16章7節の復活の朝、空の墓で女たちが告げられた言葉です。「ですから行って、お弟子たちとペテロに、『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』とそう言いなさい。」復活した主イエスとガリラヤで会えるというのです。復活した主イエスが弟子たちや人々の前に姿を現すことを復活顕現と言いますが、復活顕現の場所については、福音書の間で、異同が見られます。マルコ福音書では今読みましたように、復活のイエスはガリラヤで再会すると言われているように、ガリラヤ顕現なのです。

マタイ福音書も、基本的に主イ

エスがガリラヤで再会を果たすとされるガリラヤ顕現なのですが、空の墓で天使からメッセージを告げられた婦人たちが弟子たちにそのメッセージを伝えに行く途中で、彼女たちに主イエスが現れます。つまりマタイ福音書では、エルサレム顕現(婦人たちに)+ガリラヤ顕現(弟子たちに)の形を取っているのです。マタイ福音書28章6-10節。「28:5 すると、御使いは女たちに言った。「恐れてはいけません。あなたがたが十字架につけられたイエスを捜しているのを、私は知っています。マタ28:6 あの方は、ここにはおられ



「あの方はここにはおられない」

ない。かねて言われていたとおり、復活なさったのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。28:7 それから、急いで行って弟子たちにこう告げなさい。『あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれ

る。』確かに、あなたがたに伝えました。」マタ28:8 婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。28:9 すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。28:10 イエスは言われた。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」そしてガリラヤに帰った弟子たちは、主イエスが指示しておられた山に登り、そこで主イエスと再会します。マタイ 28章 16－17節。「マタ28:16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。28:17 そして、イエスに会い、ひれ伏した……」。マタイはガリラヤ顕現を基本にしてエルサレム顕現をプラスして語ります。



ルカ福音書はエルサレム顕現です。ガリラヤ顕現を語りません。

エルサレムからエマオ〔エルサレムから約11 km〕に向か



う2人の弟子と道中を共にしてきた旅人を、2人が無理に引き留めその夜共に泊まる宿屋を決めて、食事の席でその旅人がパンを割くと、弟子たちの目が開かれて、その人が単なる旅人ではなく主イエスご自身であると分かります。しかし分かると同時に、主イエスの姿は見えなくなってしまいました。2人は急いで、エルサレムにとって返します。ルカ福音書 24章 33－36節。「24:33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、24:34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。24:35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。24:36 こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われ

た。」

ヨハネ福音書はエルサレム顕現＋ガリラヤ顕現の形を取っています。ヨハネ20章では、エルサレムにいたマグダラのマリア、そして弟子たちにと、順次顕現します。ヨハネ福音書は20章でいったん終わっています。いったん終わった福音書に、21章が後から追加されています。ですから一般的に21章をヨハネ福音書の「付録」と呼びます。「附録」ですが、本編に劣らず大切な附録です。この21章にガリラヤに顕現した主イエスと弟子たちの姿が描かれます。弟子たちがガリラヤ湖で漁をしている最中に、主イエスが顕現します。そして漁を終え岸に上がって食事を共にした後、主イエスはペトロと向かい合い、彼のキリストに対する愛を確かめた上で、「わたしの羊を飼いなさい」とペトロの務めを再確認するのです。



主イエスは、エルサレムとガリラヤのどちらに現れたのでしょうか。おそらくどちらにも現れたの

でしょう。福音書の復活の物語は、伝承が伝わっていく際の生々しい不整合さが残っています。しかしそこにこそ主イエスの復活のリアリティが垣間見えます。復活の物語が作り話(作文)であれば、もっと整合的なつじつまの合う話になったことでしょう。まだ統合されない段階の復活伝承に、福音書の記者たちはそれぞれ出会ったのでした。どこに意味の中心を置いて福音書を執筆するか。ルカはエルサレムから世界へ地の果てへと向かっていく世界宣教の出発点としてのエルサレムの重要性を、エルサレム顕現を通して主張します。マルコはガリラヤ顕現の予告を通して、弟子たちのガリラヤ、信仰におけるガリラヤの重要性を主張しています。マタイとヨハネはエルサレム顕現とガリラヤ顕現のバランスを取って執筆しています。それぞれに復活のもっているインパクトと意味が表現されています。

ではマルコにとってガリラヤ顕現あるいは「ガリラヤ」とは、何を意味しているのでしょうか。このとき重要なのは顕現場所に関する歴史的推測ではなく、弟子たち

にとって「ガリラヤ」のもっている意味です。「ガリラヤ」は弟子たちが始めて主イエスに出会った場所です。また「ガリラヤ」は弟子たちの信仰が始まった場所でもあります。そして「ガリラヤ」は弟子たちが召命を受けた場所です。かれらの信仰の原点、それが「ガリラヤ」です。「放蕩息子」の話と重ねて考えましょう。「放蕩息子」の故郷は父親が待っているところ。彼が我に返って帰っていくところ。ガリラヤは弟子たちが帰っていくところ。彼らの信仰が始まった信仰の原点、それは同時に彼らの信仰が再び始まるところ、信仰が再生するところです。彼らの信仰のふるさと。主イエスが彼らを待っておられるところなのです。弟子たちがガリラヤで再び



弟子の召命「わたしについて来なさい」

主イエスに出会うとき、主は再び「わたしについてきなさい」と言われるでしょう。そこから再び始まるのです。信仰の原点から再び始まるのです。わたしたちも信仰の原点に立ち返るとき、新たな出発が待っ

ているのです。つたなくとも弟子たちの信仰が始まったところ、そこがまた新たな出発点でもあるのです。しかし、かつてと同じようであっても、やはりかつてとは違った始まりなのです。

主イエスが弟子たちのつまずきを予言されたとき、ペトロは自分の弱さがまだ理解できていませんでした。自分だけは人とは違う、と思っていたのです。自分の強さに自信があったのです。29節。

「14:29 するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。」ペトロの情熱も決意も、決してウソではありません。ウソではないのですが、自己認識が本物ではないのです。気持ちだけは理想を表明します。しかし現実、懸け離れたところでその姿を露呈します。14章30節。「14:30 イエスは言われた。『はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。』」

「はっきり言っておく」は原文では“*Ἀμὲν*”（アーメン）という言葉です。「本当です」「まことに」「その通りです」という意味で、

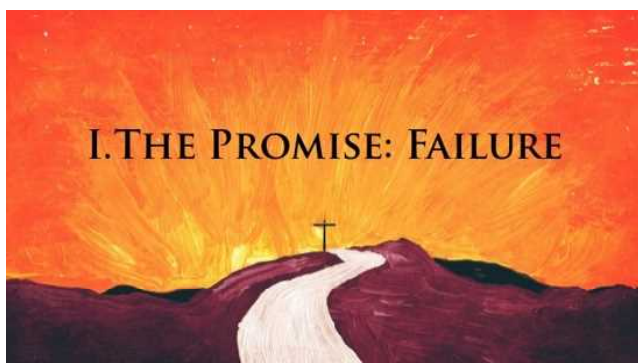
ふつう祈りや宣言の後につきます。その「アーメンが」冒頭に置かれているのです。主イエスは断定的な予告をしておられるのです。ペトロの挫折が確実に起こることと見ておられるのです。しかしそれだけではありません。それがペトロにとって必要なこととしても、「アーメン」なこととしても見ておられるのです。それはあの放蕩息子が、自由を享受してついには挫折することが必然であったのと同じなのです。そこから放蕩息子は「我に返る」のです。本物の自己認識に至るのです。本当の自分を突きつけられる。それは、銀や金が「火に入れ」られ「精錬」され「試され」て鍛えられるのと同じなのです。

ペトロは自分の意志の強さに自信があったのでしょうか、強固な意思表明を見せています。それとも、一旦「つまずきません」と言い出した手前、もう後に戻ることが出

来なかったのでしょうか。31節。

「14:31 ペトロは力を込めて言い張った。『たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。』皆の者も同じように言った。」しかしこの決意がどれほどもろく崩れ去るかを、わたしたちは知っているのです。この弟子として素直で健気なペトロの反応は、実は、主イエスの言葉を否定しているのです。主イエスの予告よりも自分の決意の方が確実だとしているのです。自分の決意の強さがそのまま現実になると思っているのです。彼は死の覚悟を表明しました。勇気ある素晴らしい表明かも知れません。しかし彼は、死の恐怖がどれほどのものかを知らないのです。ペトロの過信（自分への過剰な信頼）こそが、素直で健気に見える反応の問題点なのです。

放蕩息子は「我に返り」ました。すでにその物語を読んだときに見たように、彼が「我に返る」ことは「父に帰る」と重なっていました。ペトロも「我に返る」（自分自身に来る[ルカ15:17]＝本当の自分に返る）ことが必要なので

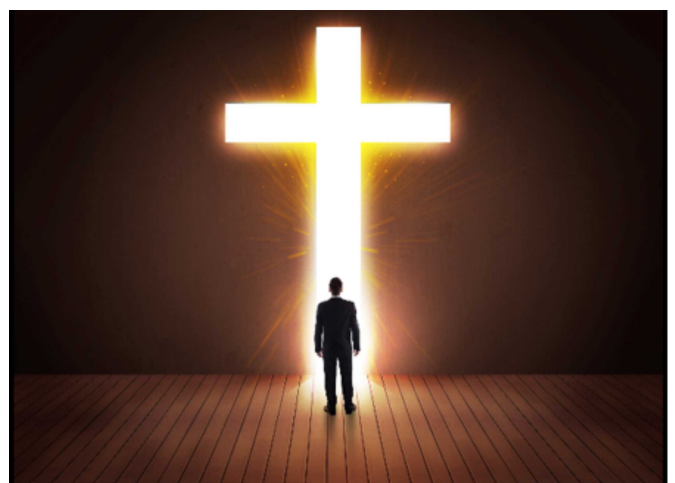


す。放蕩息子は父の許に帰りました。ペトロはどこに帰るのでしょうか。それがマルコ福音書の「ガリラヤ」が持っている意味なのです。28節「14:28 しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」そこで主イエスは待っておられるのです。父親が弟息子を探すような思いで待っていたのと同じように、主イエスも、探すような思いで弟子たちを待っておられるのです。ペトロをだけでしょいか。いいえ他の弟子たちも同じです。主イエスを売り渡したあの弟子でさえ、待っておられるのです。帰ってくる者を、主イエスは放蕩息子の父親のように受け入れられるのです。主イエスは弟子たちのつまずきを予言しました。しかし主イエスは、弟子たちを捨てないのです。では、弟子たちはガリラヤの主イエスの許に、どのような顔をして戻れたのでしょうか。「もうあなたの弟子と呼ばれる資格はありません」と告白したのでしょうか。分かりません。しかし弟子たちがガリラヤに立ち返ったことだけは確かでしょう。しかし一人の弟子はついに、帰ってきませんでした。

ユダはガリラヤに戻って来なかったのです。マタイによる福音書は、彼がエルサレムで悲痛な自死を遂げたと伝えます(27:5)。

ガリラヤでの主イエスとの再会。そこではあのゼカリヤ書13章9節bの言葉が現実となるのです。「**彼がわが名を呼べば、わたしは彼に答え／「彼こそわたしの民」と言い／彼は、「主こそわたしの神」と答えるであろう。」**

受難の最中にも、主イエスは弟子たちを訓練されていたのです。自分の決意の強さがそのまま現実になるという思いこみが、失敗に終わる。そのことによって自分への過信が打ち砕かれます。弟子たちはその強固な意思表示とは裏腹<sup>ていたらく</sup>な為体を露呈するのです。しかしその時こそ、十字架の意味が深く理解されてくるのです。そして彼らは、自分たちの出会うべき方、



信頼すべき方、従うべき方を確認するのです。

では一方、弟子たちにとって〈エルサレム〉とは何であったのでしょうか。そこで彼らは、リーダーを失って、自立を余儀なくされました。その時、十字架から復活に至る一連の出来事が、彼らへのメッセージと成ったのです。十字架の赦しと、復活の希望。彼らの「自立」は、今や、復活の主イエスと共にその意味を刷新されるのです。なぜ初代教会はエルサレムに設立されたのでしょうか。弟子たちが一旦ガリラヤに戻った後エルサレムに上ったとしたら、自分たちのリーダーを殺した<sup>まち</sup>城市に帰ったとしたら、彼らを支えていたのは、今や復活したその方に向けた希望以外にないでしょう。そしてそこから、ルカ文書(ルカ福音書・使徒言行録)が伝えるように、主イエスの遺志を完遂するための

活動が世界に向けて力強く始まっていったのです。

わたしたちもガリラヤに帰りましょう。主イエスの待っておられる所、放蕩息子を待っていたあの父親のように、わたしたちを待っておられる主イエスの許に帰りましょう。失敗があれば、失敗を通してより深く十字架を理解させて頂きましょう。いつも信仰の原点に返りつつ、出会うべき方、信頼すべき方、従うべき方を確認して、わたしたちも自分のエルサレムに打って出ましょう。新しい一週間の歩みも、主が共にてくださるように。祈りましょう。

2019.7.28 日本基督教団・千歳丘教会



14:27 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆わたしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう』／と書いてあるからだ。

14:28 しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」

14:29 するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。

14:30 イエスは言われた。「はっきり言うておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」

14:31 ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。

14:27 Καὶ λέγει αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς ὅτι Πάντες σκανδαλισθήσεσθε, ὅτι γέγραπται, Πατάξω τὸν ποιμένα, καὶ τὰ πρόβατα διασκορπισθήσονται.

14:28 ἀλλὰ μετὰ τὸ ἐγερθῆναί με προάξω ὑμᾶς εἰς τὴν Γαλιλαίαν.

14:29 ὁ δὲ Πέτρος ἔφη αὐτῷ, Εἰ καὶ πάντες σκανδαλισθήσονται, ἀλλ' οὐκ ἐγώ.

14:30 καὶ λέγει αὐτῷ ὁ Ἰησοῦς, Ἀμὴν λέγω σοι ὅτι σὺ σήμερον ταύτῃ τῇ νυκτὶ πρὶν ἢ δις ἀλέκτορα φωνῆσαι τρίς με ἀπαρνήσῃ.

14:31 ὁ δὲ ἐκπερισσῶς ἐλάλει, Ἐὰν δέη με συναποθανεῖν σοι, οὐ μή σε ἀπαρνήσομαι. ὡσαύτως δὲ καὶ πάντες ἔλεγον.